

青を着る人びと



0 アZZーリの祖先たち



サッカーのイタリア代表は、アZZーリ (Azzurri) と呼ばれる。いうまでもなく、彼らが青 (azzurro) のユニフォームを着ているからなのだが、それはサッカーに限った話ではない。バレーボールだろうとバスケットボールだろうとアイスホッケーだろうと、ナショナル・チームの選手たちは男女ともに青を着る。

1910年、イタリアのサッカー選手たちが、初めての代表としての試合にあたり、選んだユニフォームの色は白であった。しかし翌年には青となり、それが今日まで、全競技にわたり、受け継がれているのだという。なぜ青なのかということについては、イタリアの空と海の色をイメージしたとか、フランス代表の色の影響などといわれているが、19世紀のイタリア統一運動の立役者サヴォイア家の色を採用したというのが、最も確実な説であるらしい¹。

たしかにフランスのナショナル・チームも、そのユニフォームは青であることから、レ・ブルー (Les Bleus) と呼ばれる。彼らがこれを着るようになったのがいつからなのかはわからないが、少なくともイタリア選手の青よりは、はるかに納得がいく。なぜならば、青はいわゆるフランスの^{トリコロール}三色旗に使われている色だからである。色彩の歴史人類学研究で名高い紋章学者ミシェル・パストゥローが、各色の論を出版するにあたり、最初にとりあげたのが青だっ

たということは、ごく自然な流れである。彼によれば、青は何世紀もかけてフランス国王、国家の色となり、最終的にフランス革命時に国民の色となったという²。そして今日の国際試合におけるフランス代表の青について触れたところで、イタリアもこの色を使っていることについて、「それがなぜなのか知りたい」と言う。

この色はイタリアの国旗には使われておらず、歴史的にサヴォア家^{〔ママ〕}の家系の色でもイタリアで支配した様々な家系の色でもまったくないからである。そこにはイタリア人自身が説明できない謎がある。この代表チームの青の起源が謎めているからこそ、多数の競技場でイタリアを代表する「青チーム (squadre azzure)^{〔ママ〕}」は無敵であることが多いのだろうか³。

どこか含みのあるこの言い回しには、自分たちこそが本家本元であるにもかかわらず、同じ色をナショナル・カラーとしている隣国へのライバル意識と揶揄が滲み出ている。実際、サヴォイア家の紋章は「赤地に銀の十字」である。しかしアメデオ6世が1366年に十字軍に参加した際、家紋の軍旗に加え、聖母マリアへの祈願を込めた青い旗を使用して以来、サヴォイアとこの色は密接に結びつくようになったといわれる⁴。それにイタリアには、ミラノのヴィスコンティ家、フェッラーラのエステ家などのように、青を含む紋章をもつ家系はかなりあるので、パストゥローの見解を鵜呑みにするわけにはいかない。

多少の矛盾はあっても、我々はパストゥローの豊富な一次史料に支えられた巧みな論理展開に惹きつけられる。いまや彼の書の大半が各国語——むろんイタリア語も含めて——に翻訳され、とりわけ美術や服飾等、視覚芸術の研究者は、それをさしたる検証も批判もせずに受け入れる。古代には「蛮族の色」とみなされたものの、12世紀には「聖母の色」となり、染色技術が飛躍的に進歩したことも相俟って流行した青であるが、赤の優勢なゲルマン諸国とイタリアではその受容がやや遅れたこと等々…。だから私は長年、イ

タリアにおいて青は「不在」であり、「人びとに進んで迎え入れられる——着衣の色として称揚される」ことはなかったと考えてきた⁵。

しかしそれは本当に正しかったのだろうか。イタリア人が20世紀初頭、国旗にも使っていない青を「国の代表」に与えたのは、フランス人が「聖母」や「国王」に払う畏敬の念とは異質の、彼らなりのこだわりをもっていたからではないだろうか。

私がここでしようとしているのは、かつての自分が下した結論を、いま一度見直すことである。すなわち14世紀末から17世紀初頭という、イタリアの服飾文化の最盛期に青を着た人物をとりあげ、彼らがこの色に託した想いを探るつもりである。まずはクリスティーナ・ド・ピザン。彼女はパリの宮廷で活躍した西欧初の女性作家であるが、れっきとしたイタリア人であり、またそのことを生涯自負していた。彼女が文字を書き、当代一流の画家に挿絵をつけさせた写本の多くに、青衣の彼女の肖像がある。続いて、フランスにほど近いサルツォのマンタ城サーラ・パロナーレに描かれた18人の英雄と女傑たち、14世紀末の北イタリアの日常生活を活写した『タクイヌム・サニターティス』写本挿絵にみられるあらゆる階級の人物たち、ミラベッコ・カヴァローリによる肖像画が印象深いイザベッラ・デ・メディチら、盛期ルネサンスの貴婦人の青の着こなしを見ていく。そして最後に、図像学事典の集大成というべきチェーザレ・リーパの『イコノロジーア』の寓意像たち——このイタリア人文主義の叡智が結集した重厚な書のなかで、いかなる事物や概念に青が与えられているのかを検証し終えたとき、我々はこの国の青に対する真意を些かなりとも掴みとることができるだろう。

註

- 1 Daniele Marchesini, “Nazionalismo, patriottismo e simboli nazionali nello sport: Tricolore e maglia azzurra”, *Gli italiani e il Tricolore. Patriottismo, identità nazionale e fratture sociali lungo due secoli di storia*, a cura di Fiorenza Tarozzi e Giorgio Vecchio, il Mulino, Bologna, 1999, pp. 313-328, in partic. pp.317-318.
- 2 ミシェル・バストゥロー 『青の歴史』 松村恵理・松村剛訳、筑摩書房、2005年、156頁。

ちなみに 2016 年現在までに、黒の論考 (*Noir: histoire d'une couleur*, Seuil, Paris, 2008)、及び緑 (*Vert: histoire d'une couleur*, Seuil, Paris, 2013) が出版されている (邦訳未刊)。

3 同書、243 頁、註 244。

4 Alessandro Martinelli, “L’azzurro italiano”, *Vexilla Italica*, n° 62, Centro Italiano Studi Vessillologici, Torino, 2006, p.45.

5 拙著『色彩の回廊——ルネサンス文芸における服飾表象について』ありな書房、2002 年、103-122 頁。

目次／青を着る人びと

0	アッズーリの祖先たち	i
1	「誠実」——クリスティーヌ・ド・ピザン	2
	1. 青衣の女性作家	2
	2. クリスティーヌのユニフォーム	4
	3. クリスティーヌの服飾観	20
	4. 青へのこだわり	26
2	「フランス」——ヴァレラーノ・サルッツォとその妻	42
	1. 青衣の勇者たち	42
	2. 「九人の英雄と九人の女傑」	50
	3. トンマーゾ3世と『遍歴の騎士』	52
	4. 「選ばれし者たち」の行列	54
	5. 英雄たちの紋章	64
	6. アマゾネスの紋章	70
	7. 宮廷人としての勇者たち	79
	8. フランスへの憧憬	85

3 「卑 賤」——『タクイヌム・サニターティス』の人びと …… 93

1. 貴族の青、農民の青 93
2. 貴族の果物、農民の野菜 96
3. パリとローマの『タクイヌム・サニターティス』 111
4. 青い農民、白い農民 121

4 「不 実」——^{チンクエチェント}16世紀の貴婦人たち …… 131

1. 青衣の公女 131
2. 貴婦人たちの^{カッソーネ}衣裳箱 133
3. 青い布の行方 140
4. 不実な女 145
5. 不倫の果てに 147

5 「嫉 妬」——チャーザレ・リーパ『イコノロジアー』の寓意像 153

1. アトリビュートとしての色彩 153
2. 『イコノロジアー』とは 154
3. リーパの色彩シンボリズムの創りかた 156
4. 青い〈嫉妬〉 163
5. リーパと色彩象徴論 169
6. 「愛の敵」 173
7. 空の青、海の青 176

あとがき 183

図版一覧 187

参考文献一覧 193

索引 207

著者紹介

伊藤 亜紀 (いとう あき)

1967年千葉県生まれ。1999年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。博士(人文科学)。現在、国際基督教大学教養学部教授。専門はイタリア服飾史と色彩象徴論。著書に『色彩の回廊——ルネサンス文芸における服飾表象について——』(ありな書房、2002年)、訳書にドレッタ・ダヴァンツォ＝ポーリ監修『糸の箱舟 ヨーロッパの刺繍とレースの動物紋』(悠書館、2012年(共訳))、マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレリ『イタリア・モード小史』(知泉書館、2014年(共訳))などがある。

青を着る人びと

2016年 10月 25日 初版 第1刷発行

[検印省略]

定価はカバーに表示してあります。

著者©伊藤亜紀 / 発行者 下田勝司

印刷・製本/中央精版印刷

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

発行所

〒113-0023 TEL (03)3818-5521 FAX (03)3818-5514

株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

E-mail : tk203444@fsinet.or.jp http://www.toshindo-pub.com

ISBN978-4-7989- C © Aki, Ito